

「お帰りなさい 天龍道人 展」

ギャラリートーク

平成 26 年 4 月 13 日 (日)

エイブル2階 和室・床の間コーナー

(1) 天龍道人を育んだ故郷鹿島の文化的土壌（風土）について （「鹿陽和歌集」「板部氏堅明詠草」を中心に）

祐徳博物館 松尾 和義

すでに床の間コーナーで絵をご覧いただいた方も多いと思いますが、天龍道人の功績は絵だけではありません。たくさんの漢詩文集が遺されています。詩人で学者、文学者です。また鹿島を離れて流浪の人生を送る人ですが、あるときは過激な思想の革命家に身を投じる人です。勤王の志士です。経世家、思想家、そして流浪の旅人です。

世が世であれば、“鹿島の坂本龍馬”ほどの知名度のある人になれたかもしれない人物だと私は思っています。ほかに、姿をくらすことに長けた忍者まがいの脚の早い人、よろず相談調停人（揉め事、争いをやめさせるに優る）など多彩な才能を持った人でした。波瀾万丈の人生を生き、数奇な運命に翻弄された人で、謎めいた部分も多い人です。私はそんな彼を生み、育んだ郷土鹿島の文化的な土壌、風土について話してみたいと思います。

早速、板部家をとりにく略系図（別紙）から見てみたいと思います。

天龍道人の父は板部忠廉。いろいろ名前を変えますが、初めの名は忠昭、忠廉の前は堅忠です。忠廉の父は板部忠重。忠重は養子で、その実父は鍋島茂明、その父は鍋島茂綱、さらに遡ると後藤家信、この人は武雄鍋島家の後藤家を継いだ人です。この人の父が龍造寺隆信です。龍造寺隆信は肥前を代表する戦国武将で、島津、大友両氏と並ぶ勢力があり、五州二島の太守として名を馳せ、当時あの秀吉からも恐れられていた武将です。天龍道人は名将龍造寺隆信まで血縁をたどることができます。

この系図で注目したいのは、鹿島初代藩主鍋島忠茂（佐賀藩祖鍋島直茂の子）の娘が、龍造寺隆信の孫である鍋島茂綱の室（妻）であり、また鹿島3代藩主直朝の先妻寿性院の妹であることです。寿性院は直朝との間に4代鍋島直條、その兄直孝（のちの格筆）を儲けます。直孝、直條兄弟も文事に優れた人でした。直條の子が鹿島5代藩主となる直堅、その子が6代藩主直郷で、天龍道人は鹿島藩とも血縁関係で結ばれているのです。

系図の右端は、鍋島勝茂を初代とする佐賀本藩の系図です。2代光茂、3代綱茂、4代吉茂、5代宗茂、6代宗教と続きます。本日、注目して頂きたいのは、本藩5代宗茂、6代宗教と鹿島の5代直堅、6代直



郷、それに板部忠廉（堅忠）とその子、天龍道人です。天龍道人と鹿島6代直郷と佐賀本藩6代宗教は同じ年に生まれています。そしてこのことが、佐賀本藩と鹿島藩の継嗣問題に関わってくるのです。

次に、天龍道人が生まれ、育つにはそれだけの鹿島の文化的風土、土壌があったことを考えてみたいと思います。板部家は板部成任の代に鍋島忠茂に仕えており、鹿島との関わりは成任の時代にすでに始まっています。忠道は天龍道人の曾祖父、号を月鑑と言ひ、すぐれた歌人です。忠重は天龍道人の祖父ですが、この人によって龍造寺の後胤（子孫）となります。天龍道人の父、堅忠は藩主直堅に幼少から仕え、「堅」の一字を頂くほど信頼がありました。また、藩中で比肩する者なしと言われるほどの俊傑、即ち才知が際立ってすぐれた人物で、学徳兼備の人でした。

ところが、5代直堅の後継問題（家督相続）で本藩5代藩主宗茂の怒りに触れ、堅忠は改易されます。改易とは身分、所領、家屋敷すべてを没収され、職を解かれ、ほかの人に変えることです。また門を閉ざされ外部との交わりが禁止され、幽閉されて配所（流罪地）で過ごす罪です。切腹の次に重い刑罰です。

これまで道人の先祖にあたる成任から父堅忠（忠廉・忠昭）までを簡略に見てきましたが、次に天龍道人の事跡を見ることにします。

1727年、道人10歳の時、ある騒動が起きます。小鍋騒動と言われるものです。本藩の大騒動の大鍋騒動に対して規模が小さい騒動なので、そう称します。天龍道人が藩主候補に挙げられるのですが、藩主になることはありませんでした。儚い夢に終わってしまいます。道人は後世、自分の詩の作品の中や作品集の名称に「蕉鹿夢」とか「蕉鹿編」とかいう言葉をよく使用しています。「蕉鹿」は中国の故事にある言葉です。要するに、道人は藩主になる機会を逸したのですが、子供の頃からひときわ誰もが注目するような人物であったことを物語る騒動と言えると思います。

1731年、道人14歳の年に重大事件が起きます。父堅忠の項で少し触れましたが、父が改易浪人となり一家は配所へ移るといふ、鹿島藩を揺るがすような事件が起きます。これは直郷が襲封した後、将軍へのお目見え願ひと言ひ、お目通りをしなければならぬことになってたわけです。すなわち初めて直接将軍と会う儀式なのですが、直郷が襲封、即ち諸侯（大名）となって所領を継いだのが、1728年11歳の時で、それから4年も経ってまだお目見えがなされていなかったのです。お目見えが延期されていたことが本藩宗茂の罪になることを回避するため、鹿島の当役であった首席家老の堅忠の責任とされ改易という罰を受けたのです。直郷のお目見えは1732年4月、15歳の時になって、時の吉宗8代将軍に拜謁が叶うこととなります。この結果、板部家は失脚、子供たちも離散の憂き目を見ることとなります。

14歳の道人は蓮池のお寺で禅を修めたり、大潮和尚に詩文を学んだりしています。18歳の頃、熊斐について絵を学んでいます。

この頃から2、30年は京都あたりに出没し、公家と交わっています。何をしていたかと言えば勤王思想による政治運動をしていました。勤王思想は徳川幕府を倒して天皇親政を実現しようとした危険な思潮です。露見すれば首が飛びます。この討幕運動で多くの人が処罰されています。

1758年宝曆事件という事件が起きます。竹内式部が幕府に処罰されます。道人もこの時、龍造寺主膳と称して、これに加担していましたが、難を逃れています。1766年、明和事件が起きます。この事



5代藩主 鍋島直堅筆「達磨図」
(祐徳稲荷神社蔵)

件で山県大弐が死罪、藤井右門が磔刑、竹内式部は遠島、道人の龍造寺主膳はまたも難を逃れます。

1770年、53歳の時、鹿島藩主6代直郷がこの世を去ります。道人も生まれが同年の1718年ですから同い年です。道人はこれから後半生の40年は生きることになります。

道人の父が流罪地、配所で過ごしていた時に詠んだであろうと思われる歌集が遺っています。しかし、この歌集の題名は「板部氏堅明詠草」となっていて「堅忠」でも「忠昭」でもありません。もしこれが堅忠や忠昭、忠廉という名称になっていれば、改易された道人の父と

なるわけで解決するのですが、「堅明詠草」には奥書も識字もありません。ところが、鹿島藩の直朝、直條、直郷ら藩主をはじめ縁故者や藩主ゆかりの人たちの歌を編んだ「鹿陽和歌集」というのがあり、これについては私が昨年、翻刻集を出していますが、この歌集の中に忠昭すなわち堅忠が堅明と同一人物であるという根拠をつきとめることができました。それについて述べたいと思います。

すなわち、先ほどの「鹿陽和歌集」の1929番の忠昭名の歌と2119番の堅明名の歌が全く同じ歌になっています。「たがために身をつくしてか難波がたあしべのかりの音のみなくらん」という歌で、表記は違って内容も同じ歌です。内容も身の不遇を詠んだもので、雁は堅忠自身と考えられます。従って「堅明詠草」は堅忠が改易された後、歌集を編纂するにあたり、一端、返上した「堅」をあえて名に冠し、初めの名である忠昭の「昭」を同訓の「明」に代えて「堅明」とし、「板部氏堅明詠草」という歌集名にしたのではないかと考えました。本人の命名か本人以外の方が命名したかは定かではありません。しかし、ここには堅明の配流先での歌が多く収録されていたり、藩主直堅を偲ぶ歌が多く編まれていることから、公にすることが憚られ、今日まで人知れず伝存してきた歌集ではないだろうかと考えます。

一方、この「堅明詠草」には配流地の歌が多く収録されていますが、「鹿陽和歌集」には改易後の配所での歌と思われる歌は次に挙げる1首だけです。2026番、井手氏の某の少年が幽居を訪ねてくれたことに対して、井手なにがしの昔に変わらぬご交誼を有難く嬉しく思うという内容の歌です。

また「鹿陽和歌集」には天龍道人の歌をただ1首だけ見ることができます。2087番「とにかくにすめばものうき夜の鶴の林のほかにもふ袖もあり」という歌です。「仏涅槃をよめる」という詞書があります。仏涅槃とは「仏教ですべての煩惱を解脱した悟りの境地。一切の苦しみから解放された不生不滅の境地」とあり、この歌は難解ですが、煩惱の苦界である、もの憂き人間世界の煩わしさから解放された道人の悟りの境地が詠まれているのではと思われます。道人の歌はこの1首だけであり、道人の後半生の信濃の国（長野県諏訪市）での画号である「天龍」が記されていることから、道人の悲運や失意の人生を経てきたうえでの、道人を煩わせた煩惱からの脱却や悟りに達した境地が詠まれている歌とみてよいのではと思われます。また天龍の号が使用されていることは「鹿陽和歌集」の成立年次を考える場合でも重要な要素となるのではと思われます。

板部堅忠が堅明と同一人ということから考えて「堅明詠草」を見てみると、堅忠の配所での生活や堅忠の失意の人生を垣間見ることができます。ここからはその中から幾首かを抽出してみたいと思います。年齢が記されている歌を幾首かあげました。この中には、40歳や49歳、65歳を迎え得た歌がありますが、特にそれほど変わったことは詠まれていません。節目の年齢を迎え得た、あるいは迎えようとする感慨が詠まれています。



「鹿陽和歌集」巻頭（祐徳稲荷神社蔵）

配所にてと詞書がある歌をまとめてみました。

85番「配所にて花を見てよみ侍りける」「世にはかくすてらるゝ身もすてずさく宿の桜の情がほなる」この歌の歌意は「世に捨てられたわが身ではあるが、宿の桜だけは私を見捨てることなく、情けをかけるように咲いていることよ」と今年も変わらず咲いた桜の変わらぬ情けをよんでいます。

186番「配所にて雁をきゝて」の詞書のある歌「かりよ今出て越路のふるさとに帰らん道を我にをしへよ」歌意は「雁よ今、お前は越路のふるさとへ帰ろうと立ち行くのであろう。私がふるさとへ帰れるその手立てを教えてくださいよ」と帰る雁に帰れぬ我が身の境遇を嘆く歌です。

420番「配所の有さまなどこまごまとはれければ」歌「いかにかく患の露のかゝるらん身は人知れぬ山のした草」歌意は「私の境遇は人知れぬ山の中の茂みのした草に等しい身なのに、どうしてこのような不遇の身のあり様を細々と尋ね気にかけて、恵みをかけてくれる人に涙ぐまれることであろうか」不遇の身に恵みをかけてくれる人への感謝が詠まれています。

442番「ある人はるばると我山舎をたづね来りて終夜ものがたりなどして」とある歌は、こんなところまではるばると訪ねてくれる友やある人への情け深さに感謝する歌です。

444番「比べては小野のむかしのしら雪も浅くや深き君が情けに」の歌は在原業平朝臣という歌の名人が詠んだ「深く積もった雪を踏み分けて君に逢うことができるとは思わなかった」という古歌を引いて雪の日の友人の来訪を喜ぶ歌です。

次に、在りし日の直堅公を回想し偲ぶ歌が5首ほどあります。

466番「直堅公世におはしましける時の御事も思ひ出で奉りて」とある歌「誠にはたちもかへるとおもふまで今も忘れずむかふおもかげ」歌意は「本当にこの世に生きて立ち返られたのかと思うまで、今も忘れ得ぬ直堅公の面影が顕ち現れることよ」と存命であった主君のおもかげを偲ぶ歌です。

469番は面影ばかりではなく、生前お情けをかけていただいた温かいお言葉までも直にお聴きする思いの歌。

394番「むくふべき道しなければ今は身に君が恵のつもれるもうし」歌意は「今となっては君に報いる手立てもない我が身である。この身となる前に受けた恵みの深さを思うとつらい」と生前受けた君の恵みに報いる手立てのない辛さを詠んでいます。

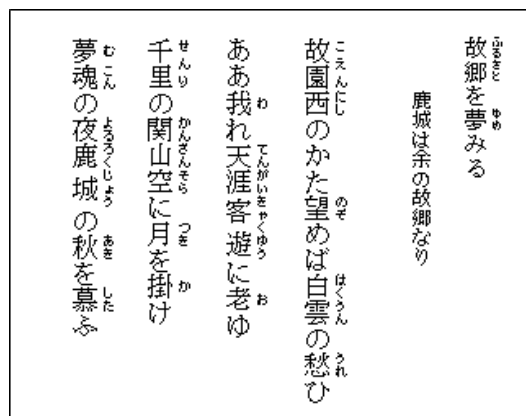
最後に、全体をまとめて、結びとしたいと思います。

- 1) 天龍道人は佐賀藩直茂以前の名門龍造寺家の後胤（子孫）です。
 - 2) 『諏訪史料叢書』などに記すように、また系図一覧表からも、天龍道人の祖父板部忠重は龍造寺隆信の曾孫・鍋島和泉守忠茂の孫にあたり、龍造寺の血統です。
 - 3) 「天龍道人碑碣銘」にも記すように龍造寺隆信から7代目の子孫です。
 - 4) 天龍道人自身も由緒ある名門の出自と自覚していたため、画賛にも自負心、矜持を表す言葉や詩句（「一家を成す」など）を用いたものと思われます。
- ◎ 上の1～4は天龍道人が龍造寺の後胤であることを示しています。
- 5) 板部忠道（通）は小城藩渋川光氏の男。藩において信頼厚い人物。和歌に長じ、歌合せの判者を務めるほどの歌人でありました。「鹿陽和歌集」に歌多数所収。佐賀藩主鍋島光茂との歌合せの歌集も存在します。鍋島直朝・直條の時代の人。



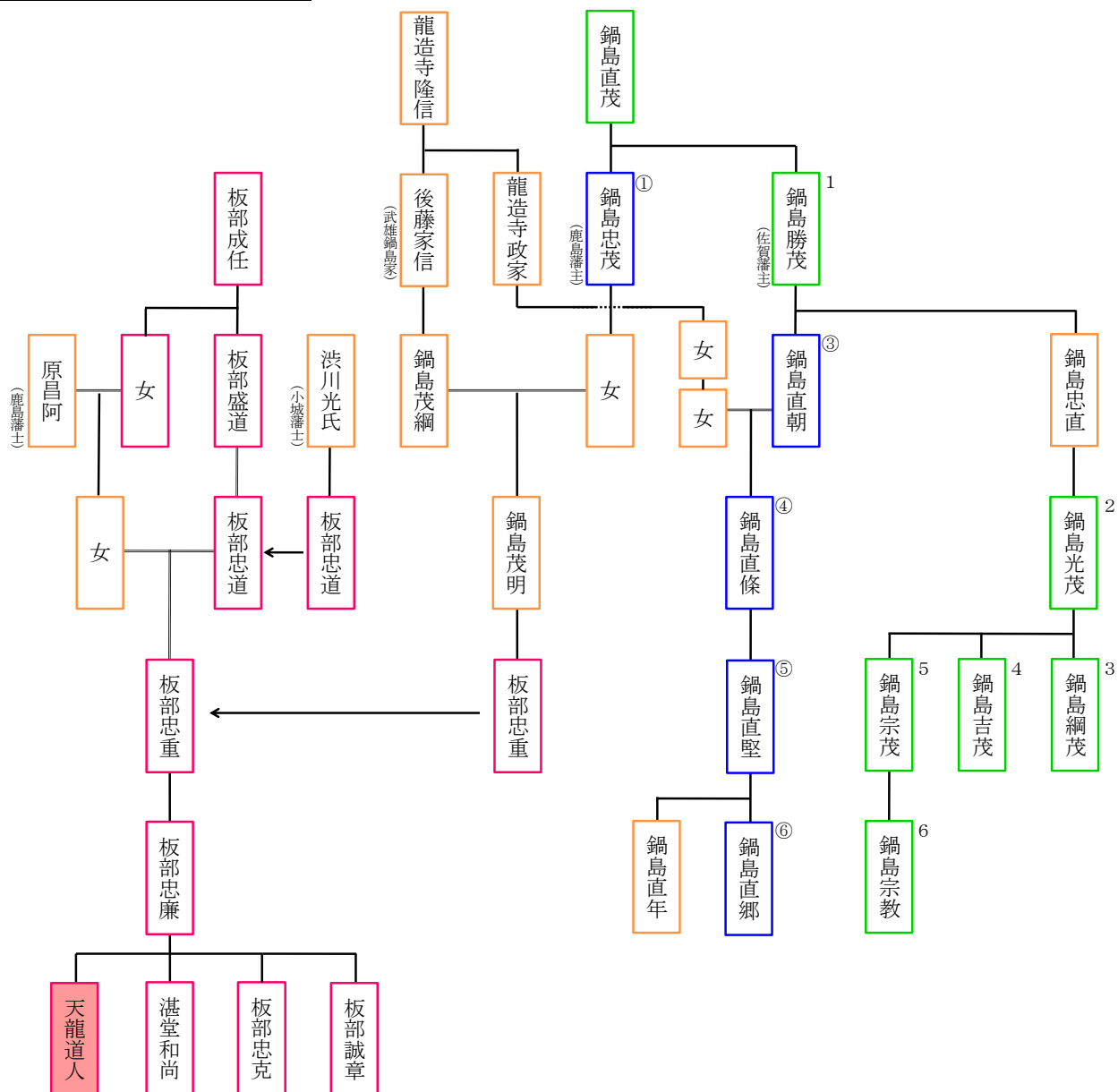
板部忠道（月鑑）と夫人浄雪の墓碑
(泰智寺)

- 6) 板部忠重は、武雄の鍋島茂綱の子である鍋島茂明の子で、「鹿陽和歌集」に藤原忠重の名で2首所収。鍋島茂綱の室は直孝（格峯）・直條の生母寿性院の妹です。
- 7) 板部堅忠（忠廉）は藩中比肩する者なし、学徳兼備、俊邁と称され、藩主直堅に幼時より仕え、直堅の「堅」一字を賜るほど信望の厚い人物。本藩や鹿島藩の継嗣問題に関与して改易浪人に。その結果、配所での生活を余儀なくされ、その子道人は僧籍となり（14歳）、子供心に父や家族と同じく苦渋や失意を経験したと思われます。「板部氏堅明詠草」（500余首）の和歌集を残す。配所、配流地での歌、直堅を偲ぶ歌を多く収載しています。
- ◎ このように板部家は代々歌道に秀で、文化・文学的な素養を代々受け継いだ家柄であると言えます。
- 8) 天龍道人は若くして「風神秀徹の麒麟児」（『天龍道人事迹考』）、豪放にして気概ありと称される人物で、藩主候補にも挙げられ（諏訪叢書）、将来を嘱望された人物でした。
- 9) ほかの兄たちも板部誠章（板部再興後出家、号大棟）、板部忠克（医を業とす。宝暦4年兄の跡を継ぐ）、湛堂和尚（出家、神埼の安国寺9世、鹿島の普明寺10世の住持）もそれぞれ名門没落の悲哀と失意を経験したと思われます。
- 10) そうした中で93歳の長寿を生きた天龍道人は、諏訪の後半生は多くの資料が残存していますが、前半生は焰滅（焼却）したと記すようにほとんど残存していません。これは前半生の父の改易浪人という一家の悲運と失意の日々の記憶を抹消したい思いがあったのではとも思われます。
- ◎ 勤王の志士であったため、後世、子孫に禍が及ぶのを回避するための焼却であったのではとも考えられます。
- 11) 一方、漢詩集には一首だけ「故郷を夢みる」（鹿城は余の故郷なり）の漢詩が遺り、更に画賛や「蕉鹿夢」から、故郷への望郷の念を知ることができます。
- 12) 今後、前半生の道人の空白を埋めるためにも、板部家子孫の追求や鹿島に遺る歌集・関連文書の掘り起こし、それらの研究にもっと光が当てられるべきでしょう。
- 13) 若き日の道人が将来単なる画家や書家としてのみならず、漢詩文家、篆刻家、禅家などの幅広い資質や学問、技芸を備えた芸術家として一家を成すに至ったこと、他方、経世家であり勤王思想の活動家でもあったことは、やはり先祖や近親者の高い文化的風土（土壌）に育まれたものであったといえると思います。
- ◎ 系図を見ますと、歌道、連歌、漢詩文、絵画に堪能な人が多くて、文化的な香りが匂い立っている家系だと思われます。従って、こうした風土、土壌、環境があって、天龍道人の文化的素養や才能は磨かれていったと思われます。



ご清聴ありがとうございました。

天龍道人關係略系図



(注)
 ①～⑥ 鹿島鍋島藩歴代藩主
 1～6 佐賀本藩歴代藩主